

離縁された妻ですが、

旦那様は本当の力を知らなかったようですね？ 2

可愛い弟子を育てます！

ファルク

「魔道具は貴族の特権」と
主張する、
凄腕の魔道具師。

ソニヤ

ルーカスの妃。
ラーシュが【魔力なし】で
あることを夫に隠している。

ルーカス

ヴィフレア王国第一王子で
サーラの元夫。

リアム

ヴィフレア王国第二王子にして
宮廷魔術師。
サーラのことを
なにかと気にかけて……？

サーラ

十年間氷漬けにされ、
「しばた柴田桜衣」として目覚めた令嬢。
魔道具店を営み、
人々の生活を助ける。

フラン

サーラの魔道具店で
働く獣人の少年。
生き別れの家族を探している。

ラーシュ

ルーカス王子とソニヤの息子だが、
両親と違って魔力をもたない。

Characters

プロローグ

「もう一度、君を妃に迎えたい」

——聞き間違いないですね？

舞踏会の夜。王族と貴族が顔を揃えた場で、元夫に再プロポーズされた。

金髪碧眼、無駄に容姿がいい私の元夫は、このヴィフレア王国の第一王子ルーカス様である。王子じゃなくても、元夫からの再プロポーズなんて誰しも衝撃を受けるはずだ。

それが向こうしか望んでいない復縁なら、なおのこと。

——なぜ、今さら復縁を？

そもそも向こうから私を捨てたのに、今さら復縁を持ちかけるなんて自分勝手にもほどがある。

ルーカス様は私が喜ぶに違いないと思っているのか、自信たっぷりな顔で返事を待っている。

それに対して呆れ顔な私——この温度差をご覧ください。

私は復縁なんて、ミジンコの目ほども望んでない。

なぜならルーカス様は結婚前に浮気をしており、よりによって結婚式当日にそれが発覚するという最低最悪の所業をぶちかましているからだ。

そんな最悪の結婚式当日のこと。輪をかけて最悪なことに、アールグレーン公爵家令嬢である私、

サーラ・アールグレーンは氷の中に閉じ込められた。

救い出されるまで十年。目覚めた私を待っていたのは、とつくに夫からの離縁された自分の立場、夫とその浮気相手の結婚。そして彼らの、十歳になる子供だった。

彼が結婚前に浮気をしていたのは誰の目から見ても明白。私とルーカス様が夫婦に戻ることはない、と思った。

それなのに、この再プロポーズである。驚いたのは私だけではない。

王家主催の豪華な舞踏会だというのに、演奏家たちの優雅な音楽は止み、招待客たちはダンスを踊らず、水を打ったような静けさだった。

第一王子の再プロポーズの行方がどうなるのか、誰もが固唾を呑んで見守っている。

——こんな話のために舞踏会に参加したわけじゃないのに！

「サーラ。返事を聞かせてほしい」

「よくもそんなことが言えましたね」

私はにつこり微笑んで答えた。もちろん、この微笑みは友好を示すものではない。

「うん？　今は聞き間違えかな？」

ルーカス様は私のふつふつと湧き上がる怒りに気づいていないようだ。

もし私がサーラじゃなく前世の姿のままだったら、飾ってある花を彼の口に突っ込んでいたと思う。

——そう。この体の中にいる魂は従順でおとなしいサーラじゃない！

いわゆる異世界転生した魂だ。

私の前世は病気で死んだ二十六歳の日本人女性、名前は柴田桜衣という。

もっと生きたい——そう強く願った私の魂は、こちらの世界へ召喚された。

そんな私が転生したのが、亜麻色の髪に空色の瞳をした十八歳の可憐な公爵令嬢サーラだった。貴族の令嬢に転生なんて超ラッキー。人生イージーモード、勝ち組間違いなし……と思うはず。

けれどサーラは【魔力なし】だった。

【魔力なし】とは言葉の通り、魔力を持たない人間を指す。

ここヴィフレア王国は『魔術師と魔道具師の国』と呼ばれる国だ。

貴族なら魔力を持つのが当たり前。特に王族と、四大公爵家と呼ばれる家の血筋は強い魔力に恵まれることが多い。だというのに、四大公爵家の一つ、アールグレーン公爵家に生まれたサーラには魔力がなかった……

魔力がなければ魔法も魔術も使えない。そのせいで周囲から馬鹿にされて育ち、彼女はいつも自分に自信がなく、存在感を消すように、おとなしく生きてきた。

けれど、馬鹿にされる人生はもうおしまい。

私はそんな彼女に代わって復讐してやると決めたのだ。

私はサーラであってサーラではない。

だからサーラの元夫のルーカス様にも、はっきり言ってやりますよ！

「ルーカス様。まさか復縁できるだなんて思っていませんよね？」

私が笑顔で尋ねると、場の空気は水を打つどころか、氷魔法を撃ったかのように凍りついた。

「もしかして、プロポーズだとわからなかったかな？　ああ、人前だと困るってことか。恥ずかし

がり屋な君には刺激が強すぎたようだね」

どこからその自信が来るのか、ちよつと問いただしたい。

思えば一回目のプロポーズも酷いものだった。

「落ちこぼれで【魔力なし】の君に魅力はないけど、結婚してあげるよ」——これである。

王立魔術学院を卒業する直前のこと。通りすがりのルーカス様にそう声をかけられたサーラ。彼女はただ、いつものようにかかわれただけだと思っていた。

それが本気のプロポーズだと判明したのは、王宮から使者が来た時である。

そんなサーラの過去を思い出し、ルーカス様へ向ける私の目が冷ややかなものに変わった。

——はあ……。十年経っても変わりませんね。

ルーカス様には、キチンと礼儀というものを教えて差し上げなくては。

私はコホンと咳払いをし、につこり微笑んだ。

良い答えが返ってくると思ったのか、彼は私につられて優雅な笑みを浮かべる。

「ルーカス様。離縁した相手に再プロポーズをするのであれば、その前に信頼関係の再構築が必要でしょう。まずは不誠実だったことへの謝罪からです」

これでも言葉を選んだほうだ。『あなた、結婚前に浮気してましたよね？』などというストレートなパンチは控えたのだから。さすがに王族や貴族が揃う場で、明け透けに『婚約者を裏切った浮気者』なんて糾弾するわけにはいかない。はつきり言わなくとも、本人には自覚があるだろう。

「不誠実？ なんのことを言ってるのかわからないな」

私の表情は凍りついた。

——もしや浮気は男の甲斐性どころか、当然の権利だと思っている人？

なんのことか本気でわからないようで、ルーカス様は首をかしげていた。

彼が再プロポーズの場に人の集まる舞踏会を選んだ理由がわかった。私が断るわけがないという自信があつたからだ。その謎の自信、魔道具師のハンマーで木っ端微塵に打ち砕いてやりたい。

とりあえず、復縁の見込みはないときっぱり告げておこう。

私が息を吸い込み、口を開いた瞬間——

「ルーカス。どのような理由で、サーラ元妃をもう一度妃に迎えたいと言うのだ？」

重苦しい空気を見かねたのか、国王陛下が席上からルーカス様に尋ねた。

確かに理由を聞きたい。私だけでなく、ここにいる全員がそう思っているはずだ。

王族たちが居並ぶ席では、ルーカス様の正妃の座に収まったソニヤが蒼白な顔をして唇を震わせている。

長い銀髪に紫色の目をした彼女は昔から美人と名高く、十年経った今も美貌を失っていない。

アールグレーン公爵家と同じく四大公爵家であるノルデン公爵家。その令嬢であるソニヤはサーラのライバルだった。十年前、サーラからルーカス様を奪ったソニヤは彼の子を産んで妃となり、地位を磐石なものにした——今の今まで、そう思っていたはずだ。

ソニヤの父親であるノルデン公爵は、まさかルーカス様が私との復縁を望むと思っていなかったらしい。こちらも言葉を失い、青い顔で立ち尽くしている。ノルデン公爵側はショックのあまり、なんとも言えなくなっているというのに、ノリノリで追いつける人物が現れた。

「なんと！ 我がアールグレーン公爵家の役立たず……いやいや、愛娘を再び妃に迎えていただけ

るとは！ 娘は喜びのあまり言葉を忘れてしまったようです。なんなら、今からでも妃！」

インスタントラーメンじゃあるまいし、今からでも妃ってあんまりだ。

しかも今、役立たずって言いましたよね？

サーラの父親であるアールグレン公爵は大喜びで、天にも昇る勢いだ。余計ややこしいことになった気がしてならない。

「喜んでいただけでなによりです」

ルーカス様は自信たっぷりの顔で、金髪を手で払った。

いかにも容姿に自信がある、という仕草だが、実際にルーカス様は美形だ。金髪に青い瞳、甘く優しい風貌。白地に金糸のコートをまとい、それに合わせた青の魔石が付いたアクセサリーを身につけている。

「ルーカス」

国王陛下が、ルーカス様に返答を促した。

「父上。僕はもう二十八歳です。しかし、子はラーシユ一人のみ。直系の血筋を絶やさぬようにするのが王族たる者の務め。残念なことに、今までラーシユ以外の子に恵まれなかった以上、新たに妃を迎えるべきと考えました」

一見正当な理由だけど、要は『妃以外にも妻が欲しい』と言っているのと同じ。自分の妃を目の前にして、よく言えたものだ。

——完全に女性の敵！

私はそう思ったけれど、ルーカス様の意見に同意する者は意外と多かった。

「殿下のお考えはもつともでございます」

「王家の直系は皆、強い魔力に恵まれた優秀な魔術師でもありますからな。他国の脅威を考えたら、御子がラーシユ様お一人では心もとない」

そんな貴族たちの声に乗じて、サーラの父アールグレン公爵が拳を握り締め、演説を始めた。

「さすが、ルーカス様！ 国と王家を考えたら素晴らしい案でございます。王子としての責務を果たそうとする責任感。その叡知はいずれ国を支えましょう。隣にはぜひ我が娘を！ 娘は体だけは丈夫ですからな。五人でも十人でも産めるでしょう」

「じゅ、十人？ 冗談じゃありませんっ！」

怒りで頭に血が昇り、クラクラする。でも、倒れている場合じゃない。

これはまずい。ルーカス様の計画通りに進んでいる。

舞踏会だというのに、もはやどの貴族たちも踊るところではなくなっていた。演奏家たちも、楽器に触れる手が止まっている。ルーカス様の言葉を邪魔しないよう配慮しているようだ。

「ああ、ノルデン公爵。勘違いしないでいただきたい。ソニヤへの愛が薄れたわけではありません」
ルーカス様は優しい顔をソニヤに向け、悪いことなど微塵みじんもしていないという顔で微笑んだ。

「しかし、あの事故いしさえなければサーラは僕の妻でした。新たに妃が必要となれば、サーラを迎えるのが当然ではないでしょうか？」

ソニヤの顔が青から赤に染まり、唇を噛み締め、握った拳を震わせる。ノルデン公爵と共に、殺意に満ちた眼差しを私に向けてきた。

国王陛下は困惑し、アールグレン公爵は必死に媚び、四大公爵の残り二人は笑っている。

この場を収められるのは私だけ——実家に失望されようが、ルーカス様が私を恨もうが関係ない。なぜなら今のサーラ・アールグレンはもう、ただの公爵令嬢ではないからだ。

「ルーカス様。まるで復縁が決定したかのように喜んでいらつしやいます……」

わからないなら、はつきり言うまで！

「あなたとの復縁はお断りです！」

私は氷漬けにされた可哀想な令嬢でも、夫から離縁された哀れな妻でもない。

王都に立派な店を構える、一人前の魔道具師なのだから。

第一章

私は王都の裏通りで唯一の魔道具店を営んでいる。

その名も『サーラの魔道具店』。

なぜ裏通りに私の店以外の魔道具店がないのかというと、魔道具というのは高価で、一般の人々には買えないからだ。

だから魔道具店は、魔道具を買えるくらい裕福な貴族が多く住む表通りに開くのが普通。裏通りに魔道具店を開いたのは、私が初めてだった。

表通りと裏通り——王都で表通りといえば、王宮を中心に伸びる八本の大きな道のことを指し、他の道を裏通りと呼ぶ。表通りから遠ざかれば遠ざかるほど貧しい人々が住み、魔道具どころか日常的に使用する魔石すら気軽に買えるような暮らしぶりではない。

けれど、そんな裏通りにある私の魔道具店から客足が途絶えることはなかった。

なぜなら、私の魔道具店には裏通りに住む人たちも気軽に買える、安価な商品を取り揃えているからだ。安さの秘密は、王都の不用品を回収して再利用していること。壊れたものを魔道具師のスキル【修復】を使い、新品同様にして売っている。

他にも【修復】スキルを活かした修復依頼を引き受けたりして、これもまた好評だ。

そして、最近ようやく魔道具師らしい商品が一つ誕生した。

その名も『サーラの時短鍋』。

名前の通り、短い時間でお湯を沸かしたり、煮込み料理を早く仕上げたりできる便利なお鍋である。普通の鍋より使う時間が短い分、燃料が節約できて家事時間も減らせるため、家事に追われていた奥様たちから支持を得て大評判となった。今では王都だけでなく近隣の村からも、この鍋を求めてお客様がやってくるくらいだ。

だから、お店は順調である。

「まあ、順調は順調なんだけど……」

私の店では狼獣人の少年、フランが店長として働いている。

そのフランなんだけど――

「奥様。ご購入いただきありがとうございます」

上等な黒の生地で作ったベストとズボン、糊のりのきいた白いシャツに、蝶ネクタイ。そして子供用の黒の革靴を履いたフランは以前よりずっと接客がうまくなり、店長姿がすっかり板についてきた。私と暮らしはじめてからは毎日お風呂に入り、清潔感もバッチリ。茶色の髪はサラサラで、可愛い耳の毛並みもツヤがある。

そんなフランの姿を、私は黙って眺めた。

十二歳とは思えない大人びた顔をしたフランがご婦人の手を取り、出口まで誘導する。

「奥様。足元にお気をつけください」

もう片方の手にはご婦人が購入した商品があり、店のドアの前でそれを渡す。ご婦人は頬を染めて、満足そうに微笑んだ。

「まあ！　ありがとう。また来るわね、フラン君」

「またのご来店をお待ちしております」

優しい上に紳士的。そんな接客でマダムたちを虜とりこにして、フランは店の人気者となっていた。

「あの、フラン。やりすぎじゃ……」

「そんなことないよ。ヒュランデルさんが教えてくれたんだ。サーラの店の買い物客は女性が多いから、女性の心を掴んだ接客をするといって！」

ヒュランデルさんというのは、他国に複数の店を持つ大商人である。彼の奥様が店の常連という縁で、なにかと良くしていただいている。

どうやらフランは商売をやる上でヒュランデルさんからアドバイスをもらい、師と仰ぐようになっただけらしい。

「サーラ。おれ、頑張るよ！」

「は、はい……」

勢いに圧されるまま、私は首を縦に振った。

フランがこんな必死に頑張るのには理由がある。

フランはついこの間まで、借金を抱えた奴隷だった。けれどお金を稼いで自由になれたことで、次の目標ができた。

それは奴隷商人に売られた家族を捜だし、奴隷身分から解放すること。

もちろん、私も応援したいと思っている。

――でも、心なしか健全で清らかな私の店が斜め上な方向に進んでない？



「マダム。本日のおすすめはこちらの商品です。貴族の屋敷で使われていた銀のカトラリーセットと燭台でして、特に燭台は台座部分の花の模様が美しく、客間にぴったりかと」

『マダム』とフランが呼んだのは、白髪でメガネをかけ、いつも紺色のドレスを着て胸元に陶器のブローチをつけている年配女性だった。

「それはいいかもしれないわ。少し近くで見せていただこうかしらねえ」

「かしこまりました」

フランは足の悪いご婦人のために椅子を用意し、他にも興味がありそうな商品を並べる。

「たくさん買っても、フラン君が家まで届けてくれるから安心だわあ。獣人はすごいわねえ。ありがとうね」

「こちらこそ、当店をご贖員にいただきありがとうございます」

フランは丁寧にお礼を言って、お辞儀する。

持ち帰る時の心配をしなくていいから、年配のお客様も買い物を憂^{うれ}いなく楽しめる。それに、フランも獣人の力を褒められて嬉しそうだ。獣人はすばしこくて力持ちで、二階から飛び降りても平気だし、重いものでも軽々持ち上げられる。

「……まあ、フランを店長にして、大正解ですね」

これなら私も工房での作業に集中できる。

私はフランと違って着飾ることのない、町娘風の動きやすさを重視したドレスとエプロン、ゴーグルを頭にのせた職人スタイルで、魔道具師のハンマーを手にする。さつきまで工房で【修復】に使う魔石の【粉碎】作業中だったから、両手に手袋もはめている。

【修復】というのは、魔石を使って壊れたものを直す魔道具師のスキルだ。

ものが壊れてもそう簡単に新しく買い替える余裕のない裏通りでは、【修復】の依頼は多い。最近近は職人たちの道具のメンテナンスも請け負っている。

「フラン。そろそろお昼ですし、スープを温めておきますね」

「うん。サーラ、ありがとう！」

私たちのお昼はサンドイッチとスープが定番だ。それぞれ手が空いた時に食べるようにしている。私がスープを温めていると、客足が落ち着いたのか、フランがキッチンへ入ってきた。

「サーラ。今日のサンドイッチは新作？」

「そうですよ。フランが釣ってきた魚をフライにしたんです」

今日のサンドイッチは魚のフライとタルタルソース。パン粉を作るために高価な中級クラスの風の魔石を使ったことは、心の中だけにソツと隠しておこうと思う。

「サーラ、この卵のソースはなに？ おれ、好きかも！」

「これはタルタルソースっていうんですよ。実は、フランが嫌いな野菜のピクルスが入ってるんです。でも、これなら食べられるでしょう？」

「ピクルス？ どこに？」

「ソースの中ですよ」

フライにした魚はタルタルソースを合わせると絶品である。ちよつと酸味のあるピクルスが良いアクセントになっていた。

「へえ。全然わからなかった！ すごく美味^{おい}しいよ！」

たくさん食べるフランを見ていると嬉しくなって、私はにっこり微笑んだ。

食べ物の好き嫌いがあるフランは年相応の子供らしく感じるけれど、商売になると違う。

「お店の売り上げは順調ですし、毎月の土地使用料も払えています。もつとのんびりやってもいいかもしれませんね」

「甘いよ、サーラ。商品は売れる時に売らなきゃ！ 余剰在庫を持たない、作らない！ 売り尽くしてなんぼだって、ヒュランデルさんが言ってたよ！」

「ヒュランデルさんですか……」

私はまだ会ったことがないけれど、大商人として知られるヒュランデルさん。

「フランもお世話になっているようですし、なにかお礼の品を持って、一度ご挨拶したほうがいいですね」

「大袈裟すぎるよ。大丈夫だって！」

「そうはいきません。これは親心です」

「親心って……。サーラには充分すぎるくらい、よくしてもらってるよ」

「フランの家族が見つかるまでは、私が親代わりです」

私はフランのご両親から大事な子供を預かっている立場だ。フランの身になにかあったら、顔向けできない。

「そういえば、ご家族の情報はなにか掴めましたか？」

今、フランは奴隷として売られた家族を捜している。奴隷の身分から解放しようにも、まず行方を突きとめなければ、なにもできない。

フランは肩を落とし、スープの皿を見つめて首を横に振った。

「それが全然掴めないんだ……。ヴィフレア国内にはいないって商人ギルドから返事が来た。だから、次は傭兵ギルドに依頼を出したよ」

「傭兵ギルド？ 傭兵に依頼を出せるんですか？」

「もしかして、サーラは傭兵ギルドの仕組みを知らないとか？」

「存在くらいは知ってますけど、利用したことはないですね……」

フランは口には出さないものの、『お嬢様育ちだな』という顔をしていた。

サーラが氷の中に閉じ込められるまでの記憶を、私は背後霊のように後ろから見守るかたちで追体験している。だからこの世界の知識はそれなりにあるのだけど、公爵令嬢としての記憶しかない私より、フランのほうが一般的な生活に対する知識と情報量は多い。

私がギルドについて知っているのは、この世界には三大ギルドが存在するということくらいだ。

三大ギルドとは商人ギルド、傭兵ギルド、職人ギルドを指す。

商人ギルドは店を開くにあたって何度か訪れたけれど、この時もリアムという付き添いがいて、とても丁寧な説明を受けた。フランから世間知らず扱いされるのも当然だ。

職人ギルドに関しては、先日、鍛冶師のニルソンさんに聞いたことがある。「職人ギルド？ ああ、酒場に集まってワイワイやる集まりだな」という飲み会仲間のような答えが返ってきた。

どうやら職人ギルドは所属者数こそ多いものの、それぞれが個人主義で、大きな組織として機能しているのは商人ギルドと傭兵ギルドだけらしい。

「じゃあさ。今度、社会勉強がてらサーラも一緒に傭兵ギルドへ行ってみる？」

十二歳に気を遣われてしまう私は中身二十六歳の外見十八歳——これじゃ、どちらが大人かわからない。

「傭兵ギルドには魔物の素材が売ってるんだ。魔道具師も時々見かけるよ。魔道具の材料に使えるから、仕入れに来ているんだと思う」

「なるほど、特殊な素材が売っているんですね。私はまだ魔物を見たことがないんですが、フランはありますか？」

「おれは奴隷商人と獣人国からヴィフレア王国まで旅をしたから、何度か遭遇したかな。正直、生きた心地がしなかったよ」

思い出したのか、フランはぶるっと身を震わせる。話だけではその恐怖がピンとこない私は、ただうなずくだけだった。

サーラは王都のアールグレン公爵邸で生まれ育ち、領地へは一度も行ったことがない。

王都から東の方角にある領地へ行くのは両親と跡取りの兄だけで、いつも王都に置き去りにされていた。夏に避暑地へ行くのも他国への旅行も、サーラは連れていってもらったことがない。

【魔力なし】の彼女は、家族として扱われていなかった。

公爵家の体裁を保つために養われていただけで、いつも一人ぼっちだった。

——私が彼女の友達になれたらよかったのに。

何度もそう思ったけれど、私はサーラの人生を幽霊のように見守るだけの存在でしかなかった。

彼女の代わりに文句を言っていたらいいと思って、周りでわあわあ騒いでいるだけで、なにも変わらなかった。

サーラが行動しない限り、王都の外の世界を見ることが叶わず、齒がゆい思いをした。だから、私にはいつか王都の外へ出て、旅をしてみたいという密かな野望がある。

「旅って危険なんですか？」

「そりゃあ、もちろん。危険だから傭兵を雇うんだよ。傭兵ギルドで傭兵を雇って、旅の護衛をしてもらうんだ」

「傭兵の需要は多いんですね」

「そうじゃないと三大ギルドの一つにならないって」

確かにそうだ。そもそも商人は戦闘向きじゃないし、この世界の移動手段は徒歩か馬車。徒歩では魔物に追いつかれてしまいうし、魔物に襲われて馬がやられたら逃げられない。

防衛する手段がない一般人にとって、傭兵という存在は絶対に必要だ。

「傭兵は、獣人に人気の職業なんだよ。魔物を倒せたら素材はギルドに買い取ってもらえるし、高い報酬をもらえるからさ！」

「いくら稼ぐためと言っても、魔物と戦うのは危険ですよ……」

思わず、お母さんのような気持ちで心配してしまった。

「そんな心配そうな顔しなくても。おれだってわかっているよ。剣だって使ったことないし、体も貧弱だから傭兵になりたいなんて言わないって」

「それならいいですけど」

フランが無茶なことを考えていないとわかって、ホッと胸をなでおろす。

「でも、サーラ。傭兵ギルドは一度見ておいたほうがいいよ。ギルドで売ってる魔物の皮や爪は武

器や防具に使われていて、傭兵に人気なんだ」

「武器や防具……そういえば、表通りの高級な魔道具店でも売ってましたよね」

王都の表通りにあるファルクさんの魔道具店を思い出した。

魔石付きの武器と防具は高額だけど、傭兵の仕事をしている人たちには絶対に必要なものだ。

ファルクさんの店のような高級魔道具店が繁盛している理由がわかった。

王都には魔術師や魔道具師を養成する王立魔術学院があり、魔道具師は卒業したら有名な魔道具店に弟子入りして、独立を目指すのが普通だ。そして、王都で店を持つ。

魔道具師によって強化された武器や防具は、このヴィフレア王国の王都でしか手に入らない。

魔石を付ける武器や防具は、名匠と呼ばれる職人に依頼するのだが、素材にこだわれば、より強い武器や防具ができるというもの。

「魔物の素材、ですか……」

私が売りたい魔道具は武器や防具ではないけれど、魔物の素材がどういうものなのかは気になる。新しい商品のアイデアが浮かぶかもしれない。

「そうですね。近いうちに傭兵ギルドへ行ってみましょうか」

「うん。おれも依頼の結果を聞きに行きたいし」

「フランの家族は獣人ですから、もしかしたら傭兵団に雇われているかもしれないね」

「身体能力が高い獣人は大きい傭兵団に所属することが多いし、父さんも兄さんも強かったから、その可能性は高いと思う」

「フランはたくましいですね。私の知らない間に成長しているというか。ヒュランデルさんから学

んだり、傭兵ギルドに依頼してたり……」

頼もしいけど、私としてはちよっぱり寂しい。

「そうかな？ サーラのほうがたくましいと思うけど。鍋の人気は止まらないしさ。おれの依頼をギルドが引き受けてくれたのだって、この店で店長として働いているからだよ」

フランが言うように、私が作った鍋は売れ続けていて、取り扱いたいという商人も多い。

今は生産が追いつかないためお断りしているが、今後、ヴィフレア王国の村や町に行き渡るくらいになったら、他国にも売りに出す予定だ。

「変な商品も売れてるし」

「変は余計です！ ちよっとした便利グッズは、みんなが欲しくなる道具なんですよっ！」

まだ試作品の段階で量産していないけど、肉を一瞬でミンチにできる包丁や高速泡立て器など、便利なグッズシリーズを少しずつ開発している。

少し店に出したところ、なかなか好調な売れ行きだった。棚の肥やしになることも多いけど、便利グッズを見るとつい買ってしまうのは、こちらの世界も同じらしい。

「この分だと、今月の土地使用料の支払いも余裕だねっ！」

「そうですね。新しい商品の開発にも取りかかるつもりです」

私とフランは笑顔でサンドイッチをかじった。

この生活にも慣れてきて、私にとってフランは家族のような存在になっていた。

さらに生活を安定させるべく、新商品が必要だ。そろそろ大きな魔道具を作ってみたいところだけど、鍋の生産が落ち着かない限り、鍛冶工房『ニルソン一家』の生産能力が限界を超えてしまう。

鍋の注文をさばくのに精一杯で、私の便利グッズも試作品程度しか作れていないのである。それで、ニルソンさんは工房の職人を増やすため、建物の増築工事を始めた。完成すれば、王都で一番大きな鍛冶工房となる。

「増築工事が終わるまで、ニルソンさんの負担にならないものを作るしかありませんね」

「それって、どんなもの？」

「うーん。量産しない商品となると……まだ考え中です」

私とフランはサンドイッチを食べ終え、椅子から立ち上がる。昼食の片づけをしていると、店のドアに取りつけたベルが鳴った。

「ん？ お客様かなあ？」

フランが拭いていた皿を置き、店のほうへ走っていく。

「いらつしやいませ……って……」

戸惑う声が聞こえて、私も店のほうに向かった。フランがお客様に動揺するなんて珍しい。

——嫌な予感がある。もしかして、ルーカス様？ それともソニヤ？

急いで店の入り口へ行くと、そこにいたのはルーカス様でもソニヤでもなかった。

「我々は王都の魔道具師だ。店主はいるか？」

「店主に言いたいことがある！」

やってきたのは、王都で魔道具店を構える魔道具師たちだった。

彼らは穏やかならぬ様子で、私に詰め寄った。

「店主はどこだ？」

「あの、店主は私ですが……」

ずらりと私の前に並ぶのは、年齢層が高そうな男性の魔道具師たち。いずれも店の主なのだろう。彼らは胸の前で腕を組んだり、イライラと足を踏み鳴らしたりして、とても不機嫌そうだな。

普通の十八歳の少女なら怯えて泣きそうなどころだけれど、私の身近には最恐の人物がいるので、それほど彼らを恐ろしいとは思わない。

「嘘をつくな。手伝いの娘だろう？」

「いいえ。私が魔道具師のサーラ・アールグレンです」

どうやら町娘風のドレスとエプロンだったせいで、公爵令嬢に見えなかったようだ。

「なんだと……？ 公爵令嬢にしては地味だな」

「思っていたより身長も小さい……」

「十年間、氷の中に閉じ込められていたせいで十八歳の頃から成長しなかったんだろう」

本人を目の前にして、言いたい放題である。

——服装はともかく、身長は関係ないですよ？

亜麻色の髪と青い瞳、控えめな胸。平凡な外見だけれど、私だってフランと一緒にしっかり食べているから、体重が増え……身長はほんの少し伸びたはずだ。

「元妃だからって、こんな早くに店が持てるものなのか」

「俺たちが十八歳の頃は師匠に怒鳴られてばかりだった」

「独立するにしても、なかなか自分の店を持てずに苦労したのを覚えてるよ」

なにやら昔の苦労話が始まってしまった。

魔道具店を持てるのは、ごく一部の魔道具師だけだ。まず、王立魔術学院を優秀な成績で卒業し、王都で店を持つ魔道具師のもとへ弟子入りをする。師匠の店で腕を磨きつつ、自分の顧客を増やして独立。ただし、金払いのいい顧客がいなければ、店を持てずに終わる魔道具師が多い。

十八歳で店を持つのは、かなり異例なケースだった。

「外見は少し……本当に少し！ 子供っぽく見えるかもしれませんが、私がこの魔道具店の店主です。なにかご用ですか？」

色々言われたけど、彼らの心情を多少なりとも理解できる私は、怒ることなく落ち着いた態度で対応した。

そもそも中身は二十六歳。私が持つ大人の魅力に気づかれたらどうしよう。ワケアリ女風に髪を耳にかけ、フツと儂げな笑みを浮かべてみる。

「本人だったか」

「うーむ。子供相手だと話にくいな」

全力で大人の女性を演出したのに、盛大な空振りに終わった。

向こうは仕方ないという顔で話しはじめる。

「アールグレン公爵家の令嬢ではなく、魔道具師であるサーラ殿と話をしたい」

「構いませんよ。私はアールグレン公爵家から勘当された身です。なんでもおっしゃってください」十年間も氷の中に閉じ込められていたせいで夫から離縁され、妃の地位を失った私。両親は諦めればいいものを「妃が無理なら、愛人を目指せ！」などと言ってきた。それをきっぱり断ったせいで、実家から勘当されてしまったのだ。これは王都で知らない人はいないくらい、有名な話。

魔道具師たちは王宮への出入りを許される貴族の身分であり、権力にも敏感だ。顧客のほとんどが上流階級である彼らにとつて、四大公爵家は決して敵に回してはならない相手。そんなことになったらすべての貴族が店の利用を控えるだろう。

わざわざ「公爵家の令嬢ではなく」と確認するのは、それほど四大公爵家を恐れているからだ。

「ならば話をさせていただく。サーラ殿、貴殿は魔道具師の技術をなんだと思っているのかね」

「魔道具師はゴミ拾いや【修復】を請け負うような存在ではない。ましてや鍋などという我々を馬鹿にした商品なんぞ論外！」

「我々魔道具師は、もっと高尚なものを作るべきなのだ」

どうやら、彼らは私の仕事に気が入らないようだ。

魔道具店に並ぶのはアクセサリーや宝石箱、弓や盾、剣などが一般的で、今まで鍋を売った魔道具師はいない。手軽で便利な生活用品と一緒にされたくない、ということなのだろう。

「私は人々の暮らしが少しでも楽になる、便利な魔道具を作りたいだけです」

私が考えを述べたのと同時に、新たに店へ入ってきた人がいた。

「それをなんとか知っているかね。技術の安売りと言うのだよ」

魔道具師たちは声がしたほうを振り返る。

そして、さっきまでの気難しい顔から打って変わってパツと明るい表情を浮かべた。

「おお！ ファルク。来てくれたのか」

「ファルクよ。魔道具師の名を貶めるなど、お前からも言ってくれ！」

ファルクさんの店は王都でも三本の指に入る歴史ある魔道具店だ。私も店を開く前、ファルクさ

んの魔道具店で商品を見せてもらったことがある。

ファルクさんはここにやってきた人たちと同じくらいの年齢の男性だけど、服装は飛び抜けて派手だった。今日は赤と白のフリルシャツ、赤のタイ、金の鎖が付いた眼鏡を身につけている。あの眼鏡は素材を分析できる便利な魔道具で、金貨二百枚はする高価な品だ。

「魔道具を誰もが簡単に手に入れられるようになれば、魔道具全体の価値が下がる」

眼鏡の奥の目は冷たい。彼は店内を一瞥すると、わざとらしい溜め息をついた。

「ファルクさん。私は魔道具を一部の裕福な人間だけが使えるものにしたくありません」

「これからも、貧しい人間に使わせるといふことかね？」

「はい。みんなが使えたらいいと思ってます」

ファルクさんたちは私の魔道具だけでなく客層も気に食わないようだ。彼は、魔道具は裕福な人々の特権であるべきという考えらしい。

「くだらん鍋を売って満足しているとは、なんとも情けない魔道具師だ」

嘲笑混じりにファルクさんが言うと、他の魔道具師たちも同感とばかりに、こぞって私の魔道具を馬鹿にした。

「なにが鍋だ。そんなもの一つでなにが変わる」

「子供騙しの魔道具なんて作ってないで、アールグレン公爵に謝罪して嫁入り先でも見つけてもらうんだな」

さすがの私もこの暴言の数々にはムツとした。

「言いすぎじゃないですか？」

怒ったのは私だけでなく、フランも同様だった。ファルクさんに向かって、フランが吠える。

「サーラの魔道具を悪く言うなっ！」

フランはピンツと耳と尻尾を立て、身を低くして構える。その威嚇に、魔道具師たちは怯んだ。

——一人じゃなくてよかった。

私一人だったら、ファルクさんたちの勢いに負けていたかもしれない。

「皆さんに私の考えをはっきり言っておきます。私がしていることは技術の安売りでも遊びでもありません。私の鍋は人々の暮らしを豊かにするもの。お客様にも喜んでいただいています」

「ルーカス様の元妃でありながら、平民にこびへつらうとは！」

「貴族としての誇りはないのかね」

彼らがここまで身分にこだわるのには理由がある。

魔術や魔法を使えるのは、王族と貴族の特権だからだ。

魔術師や魔道具師になるためには、王族か貴族しか通えない王立魔術学院へ入学する必要がある。ここにいる魔道具師たちは全員が貴族で、王立魔術学院を卒業しているのだ。

平民と貴族は違う——そんな意識が幼い頃から植えつけられている。

「私が理想とするヴィフレア王国の魔術師と魔道具師の姿は、ファルクさんたちが思い描いているものとは違います」

違うというより、もはや真逆だ。

「魔法や魔術、魔道具は裕福な人々だけが独占するものでいいのでしょうか？ ヴィフレア王国に与えられた恩恵は、同じ国に住む人々に等しく与えられるべきではないですか？」

「平民と我々が同じ権利を持っていると言いたいのか」

「そうです」

私の迷いのない返事を受けて、ファルクさんたちの表情が歪んだ。

「我々とは考え方が違うようだ」

「そうですね」

一步も引かない私に、ファルクさんは苦々しい表情を浮かべる。

「魔道具師としてのあり方について、第三者を交え、話し合う必要があるようですな」

「話し合いですか、いいですね。ただし、その第三者が公平な人間であることを望みますが」

商売で揉めた時は商人ギルドが仲介し、話し合いの場を設けてくれる。だから、私はてっきりファルクさんたちは商人ギルドを使うのだと思っていた。だが——

「よし、了承は得た。早速王宮に報告させてもらう」

「王宮……？」

——え？ 商人ギルドじゃないの？

ファルクさんたちは勝ち誇った顔をしていた。

その顔を見て、今までの流れがファルクさんたちの罠である可能性に気づいた。気づいたけれど、もう遅い。

「どちらが魔道具師として正しい姿か、宮廷魔道具師を擁する王宮側に判断していただく。それなら異論はないだろう」

「宮廷魔道具師長が鍋をご覧になったら、なんとおっしゃるか」

宮廷魔道具師の中で一番偉い魔道具師長が私の魔道具を見るところを想像したのか、彼らはプツと吹き出した。込み上げる笑いをこらえきれない様子だった。

——王宮側に判断してもらって、本当に公平なの？ 私のほうが圧倒的に不利では？
ファルクさんたちは裕福な貴族の顧客を持ち、宮廷魔道具師たちとも懇意こんいにしている。

一方、実家の公爵家から勘当され、後ろ盾のない私。

「まったくもって楽しみだ」

「魔道具師を名乗れるのもあとわずかだろうが、頑張ってくれたまえ」

魔道具師たちは口々に私の敗北を予言し、去っていったのだった。



魔力を持つ者と持たない者の間には、隔たりがあつて当然だ。

ヴィフレア王家に生まれ、天才魔術師と呼ばれる弟を持つ僕は、それを身をもつて感じている。

——リアムが生まれてから嫌つていうほど、周囲から比べられてきた。

それも仕方がないことだとわかつている。

ヴィフレア王国は『魔術師と魔道具師の国』と呼ばれる国だ。

魔力を保有する王族と貴族が、それ以外の人間を守り支配してきた。かつては人間の脅威だった獣人たち。その獣人たちを魔術で荒地に追いやったのは、偉大なるヴィフレア一族の血を引く者たちと一人の魔道具師である。ヴィフレア一族の前に突如現れた彼は魔石という存在を教え、防具

や武器に使った。それが魔道具の始まりとされる。

魔道具を手に入れたヴィフレア一族は、より強い魔術を使い、魔物や魔獣、獣人と対等に戦えるようになり、最大の脅威である竜族とも戦った。

その結果、人は暗い洞穴に隠れ住む必要がなくなったのだ。

誰が人間に今の生活と平穏を与えたかわかるだろう。

——そう、この豊かさは当然の権利だ。

椅子の肘掛に寄りかかり、若い音楽家たちが演奏をしているのを眺めた。この椅子一つとっても、ビロードの赤い生地を留める鉤は金で、肘掛には金より価値のある魔石がはめられている。

この通り裕福なヴィフレア王国の第一王子として生まれ、なに不自由なく育ったが——

「ルーカス様。いかがされましたか？ 今の曲はお好みではありませんでしたか？」

若い音楽家は不安げな顔をしていた。

無意識に肘掛を指で叩き、音を鳴らしていたようだ。

退屈を紛らわせるため、気が向くと若い音楽家たちを集めて室内演奏会を開いている。こうして音楽を奏でさせ、静かにくつろぐのが好きだ。

弟のリアムのように魔術の研究や野蛮な戦いに明け暮れるなど、王子のやることではない。

「別の曲を」

「は、はい！」

穏やかな曲が流れ、目を閉じた。

僕は毎日、満ち足りた生活を送っている。

——なのに、なんだ？ このイライラした気分は。

いつもと変わらない生活を送っているはずなのに、どこか落ち着かない。

この演奏も、退屈で仕方がない。若い音楽家たちは未熟だ。未熟だとわかって聴いている。しかし、今までこんな不快な気分になったことはない。

才能ある若い音楽家を王宮に招き、演奏させて報酬を与え、生活の支援をするのも王族や貴族のたしなみの一つ。成長した音楽家たちは王立歌劇場や王宮の舞踏会で演奏する榮譽が与えられる。

これも王子の務めだと思い、彼らを支援しているのだが、どの曲を聞いていても、頭をよぎるのは裏通りで楽しげに笑って暮らすサーラの姿だった。

サーラは十年、氷漬けになっていた僕の妻だ。

十年前、僕が彼女を妻にしたのは、リアムが気に入っていたからだ。

そうでなければ四大公爵家の令嬢とはいえ、王族である僕が【魔力なし】を選ぶわけがない。しかも、暗くておとなしく存在感がまったくなかった。

リアムはなぜ彼女を気に入ったのか、さっぱりわからなかったが、今なら『なるほど』と思える部分がある。

少々……いや、かなり無礼なところがあるが、不思議なことに彼女だけは、つい許してしまう。

——一体彼女になにがあつた？ 十年前とは、まるで別人のようだ。

以前の彼女を思い出してみよう。

「ルーカス様が良いと思われるほうで結構です」

「すべてルーカス様のお好みに合わせます」

これが十年前のサーラである。

反論することがない、おとなしい平凡な令嬢だったというのに。今のサーラは真逆だ。

自立すると言い出して一步も引かず、公爵令嬢だというのに働いている。お金を稼ぐことを恥と思っていないようだ。

アールグレン公爵は勘当したと公言しており、もはや家に連れ戻そうとする様子もない。

十年前の彼女なら、父親に叱られただけで泣きそうな顔をしていたのだが、今はどうだ？

清々しいまで実家を無視している……というか実家があることすら忘れてるように思える。

「……どう考えてもおかしいな」

「ルーカス様？ なにか気にかかることがおありですか？」

妻であるソニヤは僕を気遣うふりをしているが、目は若い男の音楽家を追っている。

けれど、僕はその目をこちらへ向けることができる。

それも、たった一言で。

「サーラだよ。彼女のことを考えていた」

ソニヤが慌てて僕のほうを見て焦り出した。

「ま、まあっ！ わたくしという妃がいながら、元妻のことが気にかかりますの？」

——そっくりそのまま、その言葉を君に返すよ。

僕の存在を無視していた後ろめたさからか、ソニヤの声は上擦っていた。

表向きは今も熱々のように見せているが、僕たちの夫婦仲はこんなものだ。

「君も気になっているはずだ。ゴミを売っている店が繁盛し、おかしい鍋を売り出した話は聞いて

いるだろう？」

「え、ええ……。そうですわね」

ソニヤの紫色の目が泳ぎ、不自然な態度で僕から目を逸らした。サーラの魔道具店について、彼女は触れられたくないようだ。

先日、サーラの店がある周辺一帯で、火の魔石が凍る事件が起きた。その事件の犯人を捕まえようと、宮廷魔術師たちが動いている。

捜査を指揮しているのは宮廷魔術師長のリアムだ。

リアムはすでに犯人がわかつているはずだが、わざと捜査中になっているのは、ソニヤの動きを封じるため。『いつでもこちらは切り札を取り出せるぞ』と、リアムはソニヤを脅しているのだ。

——ソニヤの計画は浅はかだったとしか思えない。もう少し賢い女性かと思ったんだけどね。

彼女は幼い頃から優秀な魔術師だった。それだけでなく、誰もが羨む美貌の持ち主で四大公爵家の令嬢。彼女以外、僕の妃にふさわしい女性はいないだろうと言われていた。

王立魔術学院の成績は優秀だったが、賢かったわけではなかったらしい。

王家が所有する魔道具を持ち出して使えば、犯人は王族だと言っているのと同じ。それくらいわかるだろうに、考えが及ばなかったとは。

正直、父上から次期国王として指名されるまで醜聞は避けたい。

ソニヤは余計なことをしてくれたものだ。僕の足を引っ張る彼女が、妃としてふさわしいと言えるだろうか。

「ルーカス様はサーラを側妃になさるおつもり？」

「愛人よりは現実的だね」

「ルーカス様！」

ソニヤが怒鳴ったことで演奏が止んだ。

何事があったのかと音楽家たちが僕たちを見る。ソニヤはハッと我に返り、椅子に座り直した。

「……どうぞ、続けて」

音楽家たちの演奏は乱れて不協和音が続き、聴けたものではなかった。

「サーラはリアム様と結婚するのかもしれませんが。二人は親しくしていますもの」

「二人は結婚できない」

冷たく言い放つと、ソニヤがわずかに怯んだ。

あの二人の結婚だけはないと言い切れる。サーラは僕の妻として王宮へ入った身だ。

本来であれば、一度王族の妻となった女性性は王宮から自由に出られない。他の男の妻になるなど、もつてのほか。離縁された妃が王宮以外で暮らせるとしたら、監視付きの離宮か修道院だけ。

それなのにサーラは僕をうまく煽り、罠にはめた。サーラはわざと自分に不利な条件を出し、僕に無理だろうと思いつまらせて承諾を得て、堂々と王宮から出ていったのだ。

——相手がサーラだと思って油断したな。

「気に入らない」

「もっ、申し訳ありません！ 未熟な演奏をお聞かせしてしまい……」

音楽家たちの演奏が止んだ。切り上げるのにはちょうどいいタイミングだと思い、席を立った。

「次回の演奏に期待しよう。精進したまえ」

「お待ちになって。ルーカス様！ どちらへ行かれますの？ わたくしもご一緒いたしますわ」
ソニヤがなにか察したのか、そんなことを言い出した。

今まで僕に関心がなかったくせに、サーラが目覚めた途端、ライバル心が復活したらしい。

彼女は『第一王子の妃』という肩書きが欲しくて僕と結婚した。そして、次に狙うは『王妃』の肩書きである。僕は僕で、彼女に期待しているのは実家のノルデン公爵家の後ろ盾であり、他に期待することはなにもない。

結婚して十年——お互いの利害が一致しているから、仲のいい夫婦を演じていられるのだ。

「君は演奏を最後まで楽しんだらいい。僕は図書館へ行く。調べものがあつたのを思い出した」

「図書館……。そうです。でしたら、わたくしは演奏を最後まで楽しませていただきますわ」

「ああ」

僕がサーラのもとへ行くとも思ったのか、ソニヤはこちらの行動を目で追っている。

——煩わしい。

僕の即位を後押しするのはノルデン公爵だ。だが即位した後、ノルデン公爵家がしゃしゃり出てきて権力を奪われるのは困る。

できることなら四大公爵家すべてを僕の味方にし、リアムが即位する可能性を潰したい。

そのためにはソニヤの実家以外の公爵家も味方につける必要があるが、この四家がまとまった試しはなく、常にいがみ合っている。権力争いをしているから当然と言えば当然なのだが、父上も四家の均衡を保つのに頭を悩ませている。

四大公爵家を抑えるには圧倒的な力が必要だ。だから父上は、化け物のような魔力を持つリアム

を王に据えるつもりなのだ。

——すでに僕は二十八歳だ。子供もいる。それなのに、父上からまだ次期国王の指名を得られないとは……

父上がリアムを即位させたいと思っているのは明白だ。今までリアムが成長し、王となるのにふさわしい妃を迎えるまで待つていたのだ。

リアムは二十二歳——父上はリアムを王にと言いつい出しかねない。

「……なぜ、僕ではいけないんですか」

窓から差し込む明るい日差しが、足元の床に濃い影を作る。今の声が誰にも聞かれていないことを確認し、再び歩き出した。

苛立ちを隠し、きつく拳を握り締める。手のひらに爪が食い込んで痛みを感じたが、力を緩めることはできなかった。

弟への激しい嫉妬心を痛みで隠す。どうやっても敵わない僕の異母弟。

リアムの凄まじさは魔力だけではない。どれだけ僕が努力しようが、リアムは僕をやすやすと超えていった。

サーラを救うため、王宮の図書館にある本を読み尽くしたとされるリアムだが、僕のほうは難解な古代語は単語程度しかわからない。

ヴィフレア王国の王宮には、歴代の国王が収集した書物が保管された図書館がある。

一部の書物は写本のかたちで王立魔術学院にも置かれているが、原本は王宮の図書館にある。その図書館に入館を許されているのは王族と宮廷魔術師、宮廷魔道具師のみで、四大公爵であつても

許可されていない。

それは命に関わる危険な大魔術を記した書物があるからだと言われている——言われているが、古代語を解読できる人間はほとんどいないため、真偽のほどは謎のままである。

解読できたとしても書き残すことは禁じられている。現在、すべての魔術師たちの中で解読して読み終えているのは、リアムくらいだろう。

古代語の解読は国の過去を知るために必要であるとされ、王の務めの一つと決められている。リアムには追いつけないとわかっていても、王になった時のことを考えて定期的に図書館へ通っているが、一行ほど解読できればいいほうだ。

溜め息をつき、図書館の方角を眺めた。

図書館は王宮の敷地内にある、二階建ての大きな建物だ。四角い箱のような変わった形の造りになっている。この建物自体が初代ヴィフレア王と建国の魔道具師の遺物であり、中にある千年前の蔵書が美しく保たれているのは、彼ら二人の魔術と技術の力があつたからこそだ。

これを今の魔術師と魔道具師がやろうとしても、誰もできない。

偉大なる初代ヴィフレア王と建国の魔道具師。彼らを超える存在が、この先現れるのだろうか。そんなことを考えながら、庭を横切ると――

「お父さま！」

僕を見つけた息子のラーシュが、嬉しそうな顔で駆け寄ってきた。

駆け寄ってきたラーシュは銀髪と青い目で、ソニヤ似の容姿を持つ。魔法や魔術より剣を好み、性格も僕に似ていない。

今もラーシュは剣の稽古中だったらしく、手には子供用の剣が握られていた。

「お父さま、ぼくの剣を見ていただけませんか？」

少し離れた場所にロレンソという銀髪の騎士が控えているのが見えた。

ロレンソはノルデン公爵家の遠縁の男で、王立魔術学院時代からソニヤの護衛を務めている。今は近衛騎士団に所属しているが、王家よりノルデン公爵家に忠誠を誓う忠犬だ。

ソニヤが嫁ぐ際、ノルデン公爵はサーラのように娘が氷漬けにされると主張し、護衛も侍女もすべて自らの手の者を連れてきた。

四大公爵家の権力争いで、妃が全員死んだ時代もある。ノルデン公爵が神経質なまでに娘の身を案じ、優秀な護衛を付けるのもわからない話ではない。

そういうわけでロレンソの剣の腕は確かであるから、ラーシュが剣を習うのは構わないが、僕は剣に興味がない。

「ラーシュ、お前はヴィフレア王家の一員だろう。剣より魔術の才能を伸ばせ」

僕の言葉に、ラーシュは青い目を大きく見開いた。

ラーシュが魔法を使えないことは知っている。それなら、せめて魔術の腕前を磨くべきだ。

魔法と魔術は違う。

どちらも魔力がなければ使えないのは同じだが、魔法は詠唱や道具を必要としない。持って生まれた才能があれば自由に使える。だが、威力は弱い。

一方、魔術は術式や道具を必要とするが、強力かつ利便性が高い。

現在、魔法を使えるのは王族か王家に近い血筋である四大公爵家の者のみである。

ラーシュは十歳と幼いが、王族なのだから魔法を使えないはずがないのだ。しかし、まだ使っているところを見たことはない。

十歳だった頃のリアムは、独学で上級精霊を召喚してみせた。

王立魔術学院にも通っていない十歳の子供が、図書館の書物を読んだだけで上級精霊を呼び出したのである。学院への入学も必要ないほど、リアムの力は圧倒的だった。

『同じ王族であっても、魔力の量が違うのはなぜか？』

なぜ僕とリアムが違うのか、幼い頃から理由を知りたかった。だが、答えはまだ見つからない。

リアムほどの魔力を持たない僕の息子。幸運にもラーシュには立場を脅かす存在がいない。しかし、いつまでも魔術に興味を示さないのも困る。

「ラーシュ。王族の子なら剣より魔術に励め。剣は必要ない」

「はい……。お父さま……」

剣を握り締め、ラーシュは泣きそうな顔でうつむいた。

叱ったわけでもないのに、なぜラーシュがそんな顔をするのだろう。

——いずれ自分がヴィフレア王国の国王になるという自覚が足りていないのではないか？今のところ、王族の子はラーシュだけだ。

「……そうだな。魔術がどれほど優れたものか、まだ理解していないのかもしれない」

このまま去るつもりだったが、ラーシュに魔術を見せてやろうと思った。

僕の魔術を見れば、学ぼうという気持ちが湧いてくるかもしれない。

「手本を見せてあげよう」

力を試すにはちょうどいい。今の自分は十歳のリアムより、知識も魔術も上だ。

それを証明してやろう。

あえて、なにもない空間に魔法陣を簡略化して描く。魔石は使用しなかった。

【風の花】

なにもなかった場所に赤い花が咲く。

【風の花】

『それは忘却。血で染まる嘆きの花。花となった体は二度と元には戻らない』

激しい突風と同時に花が散り、赤い花びらが目を眩ませる。

「お父さま！ やめてください！」

危険を察知したラーシュが青ざめた顔で後ろを振り返り、声を張り上げた。

「ロレンソ！ 逃げて！」

強い風は砂をさらい、ラーシュの横を通りすぎ、ロレンソに花びらがまとわりつく。

剣など無意味だ。

ロレンソは赤い花びらに埋め尽くされ、剣をどれだけ振るっても花の幻影は消えない。視界を花に遮られ、目に映るのは血色の花だけ——ロレンソの手から剣が落ちた。

それを見て、僕はパチンと指を鳴らす。

人形のようになったロレンソの体は風で吹き飛び、木にぶつかって止まった。

「ロ……、ロレンソ……！」

ラーシュは青ざめた顔でその場に立ち尽くし、震えていた。

これでラーシュも目が覚めただろう。無様な騎士の姿に幻滅し、剣ではなく魔術に励むはずだ。

「ラーシュ。剣より魔術だよ」

僕を畏怖するラーシュの表情に満足し、笑って背中を向けた。

足を数歩進めた瞬間、ちくりと腕に痛みを感じた。

「なんだ……？」

腕に目をやると、服の右腕部分が切れて赤色の細い線が浮かび上がっていた。それが自分の血だと気づくまで時間がかかったのは、認めたくなかったからだ。

——くそ！ 精霊を呼び出すための魔力が足りなかったか！

魔術の源となる精霊は、魔術師の魔力と引き換えに精霊界から召喚される。魔力が不足していると、精霊は代わりに他のものを奪っていく。魔術師が魔石を使うのは基本的に、足りない魔力を補ったり、術の威力を上げたりするためのものである。今回、僕はそれを使用しなかった。

どれだけの代償を持っていけるのか。腕の皮膚と血、それから——視界の端で、金色の髪が一房切り取られ、すうっと消えていくのが見えた。

呼び出したのは上級精霊ではあるが、その中でも下位のものだ。それでも自分の魔力だけでは、無傷で済まないようだ。

——僕は十歳のリアムにさえ敵わないのか？

リアムが天才だと思い知らされるたび、惨めな気持ちになる。幸いにも血はすぐに止まったが、

かなりの量を持っていかれたようで目眩がした。一度胸に広がった苦い気持ちと痛みは消えない。

ラーシュには比べられる弟がいないからいいが、優秀な弟が生まれたら冷静でいられないだろう。振り返ると、ラーシュはロレンソが起き上がるのを助けていた。

ロレンソは防具を身につけていたため、怪我はしていないようだ。

突風で倒された花に気づいたラーシュが、花壇に駆け寄る。ロレンソもよろめきながら花を直すのを手伝うのが見えた。

——興が醒めた。

昔、同じような光景を見たことがある。

王立魔術学院時代、授業で使った風の魔術で花壇の花がボロボロになった。庭師に任せればいいものを、花壇を綺麗にしようとした生徒がいた。

黙々と花を直していたのは、落ちこぼれと馬鹿にされていたサーラである。

それを見たリアムが、サーラを手伝っていた——過去の記憶を思い出し、不快な気分になった。

「王族だというのに情けない」

呆れた気持ちでラーシュとロレンソを眺め、その場を去ろうとした時——

「うん？ あれは……」

回廊を歩く派手な服装の集団がいた。

その集団の中でも特に派手な男に目がいく。フリルの袖口のシャツ、赤色のタイ、金の鎖が付いた眼鏡。あの派手な中年男はファルク伯爵家出身の魔道具師だ。

ファルク伯爵家は名門貴族の一つで、四大公爵家には及ばないものの、腕のいい魔道具師と魔術

師を多く輩出していることで名高い家だった。

「おお！ ルーカス様！」

うっかり目が合ってしまった、ファルクたちがこちらへ向かってきた。

面倒だなと思いながら、作り笑いを浮かべる。

「やあ、ファルク」

「第一王子ルーカス様にお声をかけていただけたとは、光栄の極み」

ファルクは大袈裟なまでに恭しく頭を垂れ、こちらに挨拶をする。

王都でも一、二を争う魔道具店の主であるファルク。

もちろん、サーラの魔道具店など気にならないはずだ。

「元妻が魔道具店を開いたのだが、迷惑をかけていないだろうか。僕が王宮に残れと命じても、魔道具店をやりたいと言って聞かなくてね」

どうせ、サーラはファルクの眼中にも入らない。返答はだいたい想像がつく。『ははは、ルーカス様。あの程度の小娘、我々の相手にもなりませんよ。かるーくぺしゃんこにして、人生の厳しさを教えてやります』といったところだろう。

「それが、困っているのです」

「うん？ 困っている？」

返ってきたのは、想像と真逆の答えだった。

「我々、王都で魔道具店を営む魔道具師たちがここに集まったのは、宮廷魔道具師長にお会いし、現状をお伝えするためでした」

「けれど、鉱山へかけており不在とのこと……」

宮廷魔道具師が王家所有の鉱山へ行くことは珍しい話ではない。

魔道具は魔石あつてのもの。より珍しい魔石を探し求めて採掘場へ足を運んでは、【鑑定】スキルを高める。多くの石を【鑑定】し、新たな魔石を発見するのも彼らの仕事だ。

「では、僕が代わりに話を聞こう。妻の……元妻の話なら、無関係ではないからね」

ファルクをはじめとする魔道具師たちは、あからさまにホッとした表情を見せた。

「実は、我々の店に鍋やら包丁やらを買い求める客が増えまして」

「鍋がないだとか包丁がないだとか、客から散々文句を言われ、一流の魔道具店にそんなものはないと説明すると、それでも一流かとお叱りを受ける始末でございます」

「店に上流階級でない客が入り込んで困っております。このままでは店の品位に関わります」

どうやら、サーラの魔道具は平民向けの安っぽいものばかりのようだ。利益は得ているのだろうが、魔道具師たちから力を認められているわけではない。むしろ反感を買っている。

「このようなことをルーカス様の耳に入れたくはなかったのですが、魔道具師の権威が損なわれる恐れがあります」

「魔道具師は町の便利屋ではないのです！」

「この問題について、王宮側からなにか対応していただけないでしょうか？」

僕は魔道具師たちに同感だ。魔道具は卑しい平民が使っているものではない。

「元妻が君たちに迷惑をかけて申し訳ない。これは王宮がなんとかすべき事案だ」

「ルーカス様！ わかっていただけますか！」

「サーラを王宮へ呼び出し、父上の裁定をいただくというのはどうだろうか」
「陛下の！ それはよろしゅうございますな」

貴族たちがこれだけ怒っているのだから、国王陛下である父上がサーラの魔道具店をこのままにしておくとは思えない。彼女の魔道具が国のためにならないと判断されたら、すぐにでも閉店だ。

——残念だったね、サーラ。

父上がサーラを魔道具師として認めなければ、僕が王宮へ連れ戻すまでもない。

実家に勘当され、行き場のないサーラは王宮へ戻るしなくなる。

「……そうだ。サーラ、君のために楽しい舞踏会を開いてあげようじゃないか」

王族と貴族が揃う中、サーラは魔道具師の肩書きを剥奪^{はくたう}されるのだ。

魔道具師として生活できなくなった君は、僕に助けを請うだろう。

——舞踏会の楽しい余興になりそうだな。

面白いことになったと感じながら、軽い足取りで図書館へ向かった。

気づけば、あれほど退屈だと感じていた気持ちがつっかり消えていた——



退屈なんて感じるヒマもない。

それくらい私の生活は事件とスリルで満ちている。

今日もまた『サーラの魔道具店』では事件が発生した。

なんと王家の紋章が入った手紙が届いたのである！

「開けますよ？」

「だ、ダメだって！」

「開けるだけなら大丈夫ですよ。まさか爆発するわけでもないですし」

「本当に爆発しないって言いきれる？」

冗談で言っただつたけど、一度は氷漬けにされた身。もしや爆発もあるかも——中身のわからない王家からの怪しい手紙に手を伸ばしかけて、サツと手を引いた。

フランのほうも王宮には嫌な思い出しがなく、手紙を警戒して耳と尻尾がぺちよんと垂れていた。

「脅かさないでください、フラン……」

「ご、ごめん。開けないとわからないよね」

「そうですよ！ 勇気を出して……出して……」

「サーラ。おれが開けようか？」

「いえっ！ こは私が！」

さつきから、私とフランは一通の手紙の前で押し問答をしていた。

見た目は普通の手紙だ。けれど、これは私の店に押しかけた魔道具師たちからの挑戦状である可能性が高い。

去り際、王宮に報告すると言いつけて彼らの姿が目につかぬ。

「たかが紙きれ一枚に騒ぐな。さっさと開けろ」

私とフランの背後から手を伸ばし、手紙を奪った人物がいた。

ヴィフレア王国の第二王子で、私の元夫ルーカス様の弟リウムだ。

リウムは鋭い目つきで、手紙の裏と表をひっくり返し、怪しいところがないか検分する。私たちの世界で言う警察の役目を担う宮廷魔術師の仕事をしているだけあって、中身のわからない手紙に少しも動じてない。

「ヴィフレア王家の紋章入りの手紙を、たかが紙切れだなんて思えませんか」

王子であるリウムにとっては家族からの気軽なメッセージ、もしくはメモ紙がちり紙みたいなのかもしれない。

でも、こっちは裏通りで店を構える魔道具師。一般人に向けて王家の紋章入りの手紙が届くなんて、なにかあるに決まってる！

「魔術は仕掛けられていない。この手紙は兄上からではないようだ」

「仕掛けられていたら、ルーカス様からの手紙なんですか？」

「兄上の性格を考えたら、なにか罠を仕掛けてくると思ったただけだ」

この会話からわかるように、リウムとルーカス様はお互いに信頼度ゼロの不仲である。

リウムは華やかなルーカス様とは真逆で、宝石や刺繍でゴテゴテ着飾るのを好まず、たいてい宮廷魔術師の制服である黒い軍服にマントというシンプルな姿だ。

顔立ちはルーカス様に負けず劣らず整っていて、とても綺麗だけど、残念なことに鋭い目つきのせいで人を寄せつけない。

そんな彼と私がこんな気軽に話せるのは、リウムが私を異世界に呼んだ召喚主だからだ。

リウムは氷に閉じ込められたサーラを救い出すために大魔術を使った。けれどサーラの魂は戻ら

ず、代わりに召喚された魂が私。ほとんど不慮の事故のようなかたちで巻き込まれた私への責任のつもりなのか、リウムは危険がないように、なにかと面倒を見てくれる。

私にとってリウムはなんでも相談できる唯一の相手である。今回も、王宮から不審な手紙が届いたと報告したところ、わざわざ私の店まで来てくれたというわけだ。

「警戒するほどでもなかったな」

魔術が仕掛けられていないとわかったら、リウムはどうでもよさそうな顔で手紙を眺め出した。

「なに言ってるんですか！ 私には取扱注意の危険物にしか見えませんよ！」

「ヴィフレア王家の紋章を危険物扱いするな。開けるぞ」

「あー！ リウムっ！」

「リウム様、開けたらおしまいだよ！」

リウムは騒ぐ私とフランを鋭い目で睨んで黙らせると、迷うことなく手紙を開けた。

「……舞踏会の招待状か」

リウムが面倒そうな顔をした。彼は滅多に表情を変えない男——嫌な予感がある。

「へ、へえ。そうですか……。舞踏会へのご招待だけなら、これは友好ですね、友好！」

フランを不安にさせまいとして明るく言ったのに、リウムは私の気遣いを一瞬で無駄にした。

「罠だ。閉店の危機だぞ」

「やっぱりそうなんだあああ！」

フランは頭を抱え、のたうち回った。

リウムは手紙をテーブルの上に広げ、私とフランにも見えるようにした。